明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）

第廿三年「統一」十月號

（第二百九十六號）

本佛釋尊の大慈悲……大僧正　本多日生
日蓮聖人教義綱要……僧正　井村日咸
曼荼羅本尊の文明……權大僧正　野口日主
思想の調整……成島日衛
機微譚語……九三直江兼續　九四苦樂超越　九五懺悔清淨……山根青村
田中實氏の質疑に答ふ……（一記者）
富士川博士に質す……畠山友次郎
統一俳句……統一團報

《九州》天晴會主催第二回民力涵養思想大講演會紀念撮影（大正八年八月一十三日）

前列左より工學士西、中原布教師、大僧正本多日生、下髮生海本師講出、中山吉若、古賀榮作
二列左より三郎興目針り、藤田治闘、石橋俊巌、宮本吉順、田中常吉、山本惣吉、法泉寺住職
高橋治精、藤吉良右衛門
三列左より重富仁郎、桑野雄近、高口知、山本太郎、三留阪右衛門、正南寺住職武原、一
後列左より江初次郎、春口一、高口榮三郎、石橋五初郎、今村志仁、中川俊一郎、原田本亮

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

（第二十三年九月卷）　「統一」　（第二百九十五號）

念珠ならば小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
御念珠　各種
弊店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候
京都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商　小野嘉助
電話中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

眼の藥　効能、たゞれ目、かすみ目、ほし目、くもり目、ちゝ目、つかれ目、はやり目、トラホーム等
定價壹瓶、拾五錢、廿錢、卅錢、五十錢、七拾錢、壹圓
布田

血の藥　定價二包入拾五錢、十五包入壹圓、効能、男女ちの道、產前產後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絕、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪
千葉縣山武郡源村上布田參百番地藥王寺
布田眼藥　血の藥　本舗　齋藤日章
（御注文は總へて下記振替に）
（振替東京第六七九一番）

日蓮各宗寺院御僧
法衣　草木
京都　三條通烏丸東入ル町
草木本店
電話中七三五番
振替口座東一一五五九番
東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番

●荷も神佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候●
佛像佛具
位牌木鉦　調度所
宮殿憧天蓋其他一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
御用達
京都寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」事佛師
大辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話下三二五八番
多少に限らず御用奉願上候也
●御用仰せ被下候はゞ叮嚀深切を旨と致候●

◉佛壇、佛具一切卸小賣
店員十三歳ヨリ四五六歳迄之者五名御世話被下度候

定價表　郵稅四錢
卸部　三法堂　藤田總治
京都市三條通小橋西入中島町
各宗御本山御用達
大畫佛表具師
長距離電話中二七八三番
振替口座東京二〇七一番
大阪四二五九
小賣部　三法堂　佛具陳列場
同町小橋東入

生徒募集
千葉縣千葉郡千葉町院內
（千葉神社裏通憲兵屯所向横丁）
私立山口刺繡學校
校長　山口京太郎
規則書入用の方は御通知次第校則を進呈いたします

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄（十三錢郵稅五厘）▼
（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）

寄附廣告

一金壹千圓也　内海頴二殿

右は左の方法に依つて今回寄附相成正に領收候也

一金七百圓也　統一團擴張費へ

一金壹百圓也　統一閣講師諸氏へ

一金貳百圓也　雜誌〔統一〕經營費へ

以上

一金貳圓也　無名氏

一金壹圓也　無名氏

一金七圓也　高橋辰二殿

右は何れも雜誌「統一」經營費へ寄附相成領收候也

右　統一編輯所

來る十一月十五十六日兩日

稚兒音樂大法會

常樂院日經上人

參百遠忌法要

午前九時　午後一時　法要

午後三時　說教（管長本多大僧正）

午后六時　演說（外布教師數十名）

右相營候條繰合御參詣被下度此段及御案内候也

追而準備の都合も有之候に付十一月十日迄に御通知被下度候

京都　總本山妙滿寺　法要部

各教區寺院檀信徒御中

◎編輯所より

一、和歌と俳句と一つ紙に書いて送られるのは困ります。別々にお賴み申します。

一、和歌は其稿を其儘選者に送るのですから成るべく半紙半切に賴みます。書躰は分りやすく

○勿驚天下無二と靈顯藥は之れ也

見よ（大正三年より）僅かに滿三ケ年間に數多難眼病者は勿論△不治三十一年間の盲目者（東京市淺草區千束町）橋本竹次郎（六〇）三十年間盲目者（諸國巡行）吳長存（三六）を始として壹百貳名の盲目を開眼せしめたる此の大靈藥の實力之れ發明せる本舗松鵜天龍が無限の名譽光榮なり

天下無比　松鵜目藥

主治効能　○トラホーム○眼瞼内面三顆粒○流行目○起珠○血目○爛目○熱目○打目○其外○火傷○凍傷○蟲毒○切傷○腫物○一切

定價貳拾錢

小石川區春日町十六番地　取次所　芹田

本佛釋尊の大慈悲

（婦人會席上講話要領筆記）

本多日生

△佛祖の慈悲

佛教が過去三千年の間多數の人類に偉大なる感動感化を與へ今尚ほ清き信仰心を刺戟する原動力を有して居るのは其は何れより來たるかと云ふに全く釋尊の大慈大悲の御心の泉より湧き出てゝ今日の人類に傳つて居るのて其事は寔に見易きことてあります。我高祖日蓮上人が御一代の間燃ゆるが如き慈悲心をもつて清き奮闘をつゞけ給ひ偉大なる人格の光を放つて深く我日本人の思想界に感動を與へられて居るのも一は上人の天性非凡なるに由るとは云へその主なる原動力は確に本佛釋尊の大慈大悲に感憤せられた所より起つたので之を根本に溯つてその源を探ぐれば全く本佛釋尊の大慈大悲に基くのてあります。上人は開目抄に「日蓮は智解に於ては天台大師傳教大師には及ばないが慈悲勝ぐれ難を忍ぶことに於ては決して劣りはしない」と仰せられて居りますが、この智慧よりも慈悲に重きを置かれた事は婦人が宗教を求むるに於いて心得べき大切な點てあります。

△智慧と慈悲と

智慧よりは慈悲の方が表になつて働く所に宗教の妙味が存することは勿論てありますが、但し智慧を打ち捨てゝ盲目的に慈悲の一方に走るとそこに間違つた感化が起つて來るので盲目的の慈悲は蜜に毒を含むが如きものてあります、故に只親切てあり慈悲があると言つても必ずしも尊いとのみは限らないのてあります。

釋尊の御論しの中に左の譬がある、人々が暑い時に池の水に浴して涼を取るはよき心持てあろうが、若しその池の中に毒蛇が棲んて居つて人々がよい心持に思ふて居る所を窺ふて之を食ひ殺すとしたならば如何にその池の水が涼しく又周圍の風景がよくても再びその池に浴するものはあるまい、それと同じて慈悲や親切の中に不正な毒が含んて居れば初はよい心持に思ふて喜んて居てもその中に思はざる悲に陷ることが起るのてある、故に慈悲の教てあつても他面に智慧の上から合せ見て不正の毒の混入せぬやうにせねばならず、人は常に慈悲と共に智慧をも尊とみ斯くて偏せず僻せざる心得を定むべきてあると教へ給ふて居ります、この釋尊の御論は佛教全體を貫いて居る大切なる指針てあります。

△文明と智仁

凡て人類の文明は何を意味するかと考へまするに一方には學問研究に由つて智能を啓發することゝ一方には慈悲仁愛等の德性を養ふて德器を成就することに由り智識と道德とが併進併行して適當に調和されたる社會を實現することてありませう。

△個人の人格上より

之を個人の人格を養ふ上に就いて見ても又之を廣く世の中の文明の意義に附て考へても大體同樣の調和的發達を要する

のであります。されば親子の間に就て見ても親は只親切であり優しいばかりがよいとは云へぬ、必ずよき方向を示して之を導き又時には之を訓誡して行かねばならぬ。

△**君臣の關係の上より**

君臣の關係に於ても同じである、君王の御威德は慈悲仁愛の大御心を基とはするが、それと共に智德の上に建國の精神を覺とり古今の興廢存亡の蹟を審にして經國經綸の道を謬らぬ樣遊ばす事と、而して尊嚴なる御威德を兼有遊さねばならぬ。

△**社會生存生活の上より**

又社會の共同生活に就て見ても各個人の權義を明かにすると同時に相互扶助の親切を併有して行かねばならず。

△**宗教上より**

進んで之を宇宙の上に就て見る場合即ち宗教の本質に就て見るも全く同樣であります、先づ宇宙絕對の靈位に立ち給へる本佛釋尊は大智慧ありて宇宙の眞理に合し絕大なる尊嚴を有し給ひ而して衆生に對しては大慈大悲の御光を放ち濟度の手を垂れ給ふて居る事を信ずべきであります。この本佛釋尊の大智慧を包んで現はれて居る御慈悲を頂いて渴仰恭敬の心を喚起し、この心を本として各人人格の源を開き又之を世の中に及ぼして理想の文明を建設せんとするが佛教徒の心掛である念願であります。故に御經は山ほど積んであつてもこの本佛釋尊の御智慧御慈悲を忘れたならば佛教の根本生命は失はれて仕舞ふのであります。

△**信仰の標目**

されば佛教の教を聞くには確かな目標を定めてかゝらねばならぬ、例へば日本の國民が國民道德を心得るには第一に御皇室の御靈威を本とし忠誠の心を磨いて行くべきであると同じく、佛教の信仰の心得を定めようとするには第一に本佛釋尊の御慈悲の難有い事を感銘せねばなりませぬ、若も佛教徒にして本佛釋尊の主師親三德の難有さを忘れて他に心を移すならば丁度國民として王樣を忘れ、子として父母を忘れ、弟子としてお師匠樣を忘れて居ると同樣な誤りであり、下女が親切にして呉れたと云つて父母の恩を忘れ、慈善家が餅を呉れたからと云つて國恩を忘るゝが如きは寔に心得違の事であつて初めに述べた慈悲の中の毒に中てられ池の中の毒蛇に食はれると同じであります、この親切に由つて根本の大義を迷はさるゝ程恐しい事はないのであります。

△**慈悲本源に就ては非常**

然るに佛教の慈悲の源に就ては非常なる間違いが起つて居る、それは提婆のような惡人の救はれたのも本佛釋尊の御慈悲であり槃特のやうな愚者の救はれたのも本佛釋尊の御力であり女子も小人も二乘も闡提も一切衆生悉く本佛釋尊の大慈悲の御力に由つて濟度せられたるものである。この事は誰にもすぐ了解せられるのであるが、この御慈悲の源を暗ましたり他の所より起るがように說きなさらかす者が多いのである。この誤を正し迷を覺さんが爲めに日蓮上人は身命を的にかけて活動遊されたのであります。

△**大小逆轉の誤**

儒教に於ては廣い仁愛の德のみにては人の世の道德は行はれない、必らず義を以つて之を引締めて行かねばならぬと敎へ、尤も大切な道德をば「君臣義あり父子親あり」と云ひ、又「君を無みし父を無みするは禽獸にあらずして何ぞ」と云ひ、君父の恩と他人の恩とを何一視するさへ之を悖禮悖德と云ふのである。若し君父の恩を忘れて他人の恩に流るれば之を大逆と稱するのである。露探獨探抔云ふ言葉に就いて考へ行よ、他國人より金錢等を得てその好意に報ゆる爲めに自國の恩を忘れて行動する者を指すので之を惡まぬものはあるまい。これ皆恩の感ずべき源を忘れて末より末に走りたる謬である、丁度之と同じ謬が佛教の中には盛んに起つて居るので、露探や獨探と同じ樣な働をして居るものが多いのであります、苟も日蓮主義の下に正明なる信仰を立てらるゝ人々はこの點を充分分明に理解して佛教徒の感受すべき御慈悲の源は常住不滅にして今も我等の頭上を照し日夜に御慈悲の護りを爲し給ふ本佛釋尊にて在ます事を忘れてはなりませぬ、こゝに法華經主義の特色あり、こゝに日蓮主義の本旨は存するのであります。

△**各宗徒の淺薄なる迷執**

全體各宗の人々が本佛釋尊の事を忘れて彌陀とか藥師とかの慈悲を吹聽して居るのは頗る淺薄な考から起つた粗末千萬な間違であります。何となれば佛教は初より終まで本佛釋尊の御德を忘れてよいと云ふ樣な事は一箇所もないことであります。彌陀と云ふも藥師と云ふも畢竟本佛釋尊の御慈悲の溢れが方便の智慧を合して現はしたに過ぎない。而してこれ等は法華經の教より立歸つて見れば假の言葉を以つて衆生を導き給ふた方便である、眞實我等を濟度し給ふ御佛は本佛釋尊であらせられ、過去久遠の昔より現在只今も又未來永劫の後までも唯我れ一人能く救ひ護ることを爲すと仰せ遊されて居るので、この眞實の佛教を信奉するが佛教徒の本分であり、この信仰を得て始めて世界の宗教に對して佛教が高等なる地位を保持し得るのであります。

△**本佛釋尊の大慈悲**

本佛釋尊の御慈悲は尊き事は佛教の全面を掩ひ到處の御經に依つて證明せらるゝことであり、特に法華經の壽量品はこの事の眞實を明かし給ひし最高の經文であります、今は法華經の藥草喩品の文に基き壽量品の精神より見てお話を致さうと思ふ。

妙法蓮華經藥草喩品に云く

我は是れ如來兩足の尊なり、世間に出づること猶ほ大雲の一切の枯槁の衆生を充潤して皆苦を離れて安穩の樂世間の樂及び涅槃の樂を得せしむ乃至世間に充足すること雨の普く潤すが如し貴賤上下持戒毀戒儀具足せる及び具足せざる正見邪見利根鈍根に等しく法雨を雨ふらして懈倦なし一切衆生の我法を聞く者は力の受くる所に隨つて諸の地に住す。

この經文のこゝろは旱魃になつて草も木も悉く枯れ死なんとして居る時に、一天に雲が起つて普く甘露の雨を降らすならば凡ての草木は生々として蘇生し、而して小さな色は草相應の潤を受け、大きな木は木相應の潤を得て何れも發育するが如く、本佛釋尊のこの世に御降誕遊されしは丁度旱魃の時に雲の起りしが如

く御說法によつて賢きも愚かなるも富めるも貧きも凡ての衆生が感化の益を受けしは雨を得て草木の各々に相應したる發育を遂ぐるが如くであるとの御旨意であります。この說法に由つて與へられたる效果は世間の樂及び涅槃の樂と申して、この人生々活の上に全く安心を得る事と無限向上を辿つて成佛得脫する事、この二つの上に利益を蒙むるのであります。而してこの御利益を蒙むる人は、貴きも賤きも上の人も下の人も、戒を持つ者も持たざる者も、威儀を具足する者もせざる者も、正見の人も邪見の人も、利根の人も鈍根の人も等しく皆法雨に潤ふのである。その實例を擧ぐれば惡人としては提婆阿闍世の如き人々も愚者としては鈍根の槃特に至るまでも皆悉く救はるゝのである。女人としては耶輸多羅女等の多くの人々も、又少人としては阿難目蓮等の二乘根性の人々も皆悉く救はれたのであります。これ皆本佛釋尊の御慈悲御力より起つた事であります。淨土宗や眞宗などで本佛釋尊は我等の如き末代下根の人をお救ひ遊ばす力をおもちなさらぬ樣に云ひ、只阿彌陀佛のみ之れを救ひ下さると敎ふるは何よりも恐るべき間違であります。本佛釋尊を忘れて他へ心を移すの誤りなることは始めに懇々お話し申した通りのことで之を謗法と稱して敎に背く大罪なりと法華經譬喩品には誡められてあります。

釋尊の世に在ませし時には如何なる惡人も感化を受け、如何なる貧女も救ひを蒙むつたので釋尊の御力に於て足らざる所は少しもない。雨が大中小の一切の草木を潤し得るが如くであり、經文には「身手に力あり」と仰せ遊され釋尊の御手の力で如何なる衆生も救はれない者はありませぬ。然るを釋尊の御敎を受くる佛敎徒でありながら、釋尊の御德を損するが如き事を云ふ淨土宗や眞宗の主張は全く邪說と云はねばならぬ。

日蓮聖人教義綱要（第廿六回）

井村日咸

第八章 修行

第二節 修行の總結

前節に於て、法華經修行の形式が種々に示されてあることをお話致したが、其形式と爲つて顯はるゝ場合には、其時と處とに依つて、其形式を異にする處より、佛法の修行の方法が幾つもある樣に思はるゝのであるが、其根本の修行は一つしか無いのである、末節の形式に拘泥すると、甲の形式と乙の形式に非常の相違がある樣に考へらるゝけれども、其根本元意は唯一つである、其一を把持することが最も大切な事である、種々に示された形式を通して流れて居る一脈の大道は永久不變にして、時處位に依つて變化するものでは無いが、彌々實際に觸れて來ると、時處位に依つて異つた形式を取つて顯はれて來る、故に其末節に顯はれた處を墨守すると勞して効なき事も出來るのである、此點は充分の硏究を要する處である、我々は其根本の一行を把持することを得て、而して後に各方面に對向するならば、行くとして可ならざるは無しで、如何なる場合でも法華經的の實行を示し得ることが出來るが、若し其根本を捉へ得ずして末節に囚はるゝならば法華經の行法を遠ざかるものと言はねばならぬ、現今の日蓮主義者の中には徒らに古來の習慣に束縛せられて、時代に適當なる施設を考慮せざるものもあるが、夫等は未だ法華修行の要領を得たものと云ふことは出來ぬ。

そこで、根本行とは如何なるものかと云ふと、本佛釋尊に對する『信仰』に外ならぬのである、本佛釋尊の大慈大悲に感孚して、我一切を捧げて本佛の御手に信賴依托するの誠心を信仰と云ふのである、此誠心は至極單純なるもので、彼此と理屈なぞで言ひ顯はすことは出來ないものである、所謂言語道斷心行所滅の結界である、此有樣を日蓮聖人は妙一尼御前御返事に

夫信心と申すは別にはこれなく候、妻のをとこをおしむが如くおとこの妻に命をすつるが如く、親の子をすてざるが如く、子の母にはなれざるが如くに、法華經釋迦多寶十方の諸佛菩薩諸天善神等に信を入れ奉りて南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申し候也（遺一九四八）

と御示である、信心の實際は男女の戀情の如く、親子の愛情のそれの如くに、言葉を以て言ひ顯すことの出來ない處が信心の狀態である、經には『咸く皆戀慕を懷いて渴仰の心を生ず』と說いてある、男女間の戀慕は劣情より起る處であるが、信仰は聖き情操より發動して來る熱烈なる戀慕の情である、佛に對する渴仰の精神である、男女間の劣情が時に情死沙汰を起すが如く信仰に於いても其極致に達すれば『不自惜身命』の經文の如く、身命をも捧げんとするに至らねばならぬ、此佛を渴仰するの精神か充實して來ねば本當の信仰は起つて來ない、實在の本佛に對して逢ひたい、見たいの戀慕の情と爲つて顯はるゝのが信仰心と云ふのである、觀普賢經に

世尊は常に世間に在ます、色の中の上色なり、是我何の罪有て而も見上ることを得さると、是語を說已つて復更に懺悔す（縮法四八五）

と說けるは佛に渴仰の情を生じて、我身の罪過を懺悔する信仰の狀態を說たのである、聖人は熱烈なる信仰の狀態を最も平易にお示しになつて居る、上野抄に

かつへて食をねがひ、渴して水をしたうがごとく、戀ひて人を見たきが如く、病にくすりをたのむがごとく、みめかたちよき人へにしろいものをつくるがごとく、法華經に信心をいたさせ給へ、（遺一八四四）

と申されたが、其引例に就いて其實際を考へて見たならば、其信仰なるものゝ如何なる有樣なものであるかと云ふことは明白であると思ふが、斯樣な熱烈な、信仰を本門の本尊に捧ぐるのが、日蓮主義の根本の一行である、此一行の中に一切行を統攝して仕舞ふのである、一旦此大信念に安住し了つて、更に各方面に對して活動を起し來ると、其活動は非常なる光明あるものと爲つて現はれて來るのである、此信仰の一點に一切を取纏めて行法の歸結を示し、更に展開して世間出世間の各方面に最善最美の行爲と爲つて世道人心を裨益するのが、日蓮主義の修行の貴き所以である、

信仰の狀態を經文に基いて一層鮮明に申し上げて置ふと思ふ、今の日蓮主義者の中には信仰の意義の鮮明を缺くものもありて、日蓮主義をして迷信雜信の誤に陷らしめつゝあることは慨嘆の至りであるが、信仰の意義を理解するならば迷信雜信は立ち處に絕滅せられねばならぬのである。

信仰の意義に就いては三義を具備するを信仰と云ふのである、三義とは信の體、信の性、信の相である。一に信の體とは無疑隨順を以て體とす、教主世尊の金言に對して信伏隨從して疑義を挾まざるを言ふのである、信仰の源泉は教主世尊の教法に基いなのでなければならぬ、現今の信者なるものは世間の評判や新聞の廣告を源泉として信ずるのか多いが、そんなのは信仰にはならない、信仰の源泉を失ふて居るから何等の効果は生じないのである、法華經壽量品に

心遂に醒悟し乃ち此藥の色香味の美きことを知つて即ち取つて服するに毒の病皆癒ゆ衆生既に信伏し質直にして心柔輭なり（縮法三三八）

と說けるは此意味を言ふたのである、此に反せる不信の輩をば、是の好き色香ある樂に於て美からずと謂ふて背て服せざるの輩である、此樂を服すると服せざるとに於て信不信の異目が立つ、即ち如來の教法を信奉するかせぬかゞ其岐路である故如來の教法を離れては信仰は存在しないと云ふことになる、世間の評判や新聞の廣告には信仰は無いのであるから、そんなものに基く信仰は間違つたものであると云ふことは明白であらう、第二に信の性とは一心清淨を以つて其性とす、經に

一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず（縮法三三九）

と說くものが信仰の性質である、一心とは二心なきことであるが、此は自分の信仰が或一人にのみ向つて發生せねばならぬことを言ふたのである、熱烈なる信仰は二人三人に捧げ得べきはない、若も二人三人の男に繼し得る女ありとせば、夫は婦僞であらねばならぬが如く、眞實の信仰は唯一の對象のみに向つて發現せんければならぬ、命掛けの信仰を二三の神佛に捧ぐると云ふことは出來ない、若も幾もの信仰ありと云はゞ其信仰は本物でないと云はねばならぬ、日蓮聖人が最後の遺書に（弘安五年十月七日）

心に二つましまして信心だに弱く候はゞ峯の石の谷へころび空の雨の大地へ落ると思食せ、大阿鼻地獄疑あるべからず、其時日蓮を恨みさせ給ふな、返す返すも各〳〵の信心に依るべく候（同三三九）

と御嚴誡にましましたが、信仰の本尊の純一ならざるものは、日蓮主義の信仰に於ては其意義を缺いて居るものと云ふのである、言を換へて言ふならば信仰には成つて居ないと云ふことである、折角時を費し勞力を費して信仰しても、其仕方が惡いと無駄の事を爲して居ることに成るのである故に信仰には雜信と傍法とを離れて、一心清淨の信仰を捧げねばならぬのである、（謗法の事は後節にお斷する）第三には信の相とは決定不動である、其決意の確固不拔てあらねばならぬことである、一體信仰は吾人の覺醒に基いて已が本性に立還らんと志して起つたものであるが、吾人は無始已來無明の酒に醉ふて、其本性を蔽されて居つたのであつて今度其長夜の夢より覺めたのであるが、此長き間の習慣性は一朝一夕にして取拂はるゝものでない、兎もすると頭を擡ぐるのである、故に其處に非常な大決意を要する次第である、天台大師は『三障四魔紛然として競起る』と言はれて居るか、我等の信念一度其萌芽を發生すると、內には貪瞋痴の三毒盛んに動搖して精神上に煩惱を生じ、外には親族知己の反對する等ありて內憂外患交に起りて我信仰を退却せしめんとするのである、聖人が此信仰を發表せらるゝに就て御決意の程は開目鈔に委細に御記述に成つて居る處であるが、最後の決意を示して

今度强盛の菩提心をおこして退轉せじと願しぬ、（遺七七〇）

と仰せられたが、聖人が一期の奮鬪は實に此決意の上に打立てられたのであるから、數多度の巨難も意とせられなかつたのである、我等が信仰は今身より佛身に至るまで、佛の正法を受持する處が其相である、觀普賢經に

今日方等經典を受持し奉る、乃至失命し、設ひ地獄に墮ちて無量の苦を受くとも終に佛の正法を毀謗せじ（縮法五一〇）

と說くは信の相を明したのである、我等が信仰は一旦斯くと決意した以上は、如何なる苦患を受くとも經に設ひ地獄に墮ちて苦を受くとは此以上の苦惱は無いのであるが、それでも退轉しないと云ふ、其堅固な決心を要する、現今の信心に志す人の決意は果して斯くありや否や覺束なき限りであるが、以上の三義を具備したものが法華經の信仰なるものである、纏めて圖示するを

信仰
- 體……無疑隨順
- 性……一心清淨
- 相……決定不動

南無妙法蓮華經

となる、此中一義でも缺けては信仰の意味は成就せぬ、此三義を具備して居る信仰、此を一言を以て、南無妙法蓮華經と言ひ顯はして妙法の信念と云ひ口唱すると言ふのである、一體妙法

蓮華經は、佛の敎法であります、其敎法を佛の大慈悲の思召に依り我等一切衆生に大良藥として御與下さるゝ、其大良藥を難有頂戴して、之を我等の信仰に移して、我等が煩惱の病を癒すのである、此頂載した妙法蓮華經を我等の信仰を表示する一の符號として、此中に一切の意義を含蓄せしめて南無妙法蓮華經と言顯はすのである、故に言葉は七字丈であるが其意義は信仰の三義を充分に徹底した處に顯はさるゝのである、若も此三義の中に缺くる處ありて信仰の意義が徹底せぬ樣な處があれば、縱令口に南無妙法蓮華經と唱ふればとて、所は何等の實効を奏するものでは無い、但の蓄音器たるに過ぎない、現在の法華宗の信者と自稱するもの大に反省する處がなければならぬ事と信ずるのである、口に南無妙法蓮華經と唱ふる已上は、其深い意味合を充分に心得て居らねばならぬ、此南無妙法蓮華經は文字は眞に少いが、一句萬了の句と云ふて、此少ない文字の中にあらゆる大切な意味合が含まれて居るのであるから、此を信ずる以上其意味合を打壞はす樣な事を仕してはならぬ、信仰の大切の意味合を但一言の南無妙法蓮華經に結んで、我等が如き但信無解の人の行法とお定め下されたのは、日蓮主義が末法時機相應と稱せらるゝ所以であり其敎義の深き處である、此一言の妙法に結んだ心を修行の歸結と云ふのである、一旦此に歸結を示して、此より更に展開して各方面に大活動と爲つて顯はれて來る處に法華經が萬年救護の大明敎として取經められた處は行法の根本であり、各方面に活動を顯はし來る處は行法の實際面である、此二面と稱するのである、此兩面の作用を適當に會得して活用して行く處が眞實に日蓮主義の修行を實行して居る法華經の行者と言ふのである。

曼荼羅本尊の文明

（統一閑講演大意）

野口日主

(1) 世界改造とは何ぞ

今や世界改造の聲高し焉、然れども未だ其適應の表準を聞かず、或はウィルソン氏の十四條、或は國際聯盟に於ける講和條約四百個條歟、抑も亦過激思想歟、其他の主張美は卽ち美なるべけれども、眞の改造眞の文明、最尊最上の表準は閻浮統一曼荼羅本尊なりと信ず。

(2) 將來の文明

將來の文明は無論精神物質調節の文明なるべしと雖も、少くも左の條箇を具備したる文明ならざるべからず。

（イ）大哲學に基する文明
（ロ）平等差別融合の文明
（ハ）物質精神調節の文明
（ニ）政敎一致の文明
（ホ）民衆自覺の文明

日蓮聖人所顯曼荼羅本尊は、此數意義を具備し尙且つ永遠を語れり

(3) 曼荼羅本尊訣及名義

一 輪圓周備
二 聚 集
三 發 生
四 方 壇
五 圓 場
六 齋 壇

南無妙法蓮華經
- 體道——上求菩提——信念受持の一行
- 用道——下化衆生——濟世利物の活動

菩薩行

稱し得るのである圖示すると

である、此菩薩行を行するもの此を法華經の行者と云ふのである。

七　道　場
八　壇
九　輪圓具足
十　功德集
十一　諸佛集
十二　精　醇
十三　極無比味
十四　無過上味
十五　極精醇
十六　聚　集
十七　聖衆集會處　等なり

本尊とは本來尊崇根本尊重の義なり

(4) 體相

觀心本尊抄に曰く、其爲體、本時娑婆世界上、寶塔居空、塔中妙法蓮華經左右、釋迦牟尼佛、多寶佛、釋尊脇士、上行等四菩薩、文殊彌勒等菩薩、眷屬居末座、迹化他方、大小諸菩薩、萬民ノ處天地如見雲客月卿、十方諸佛、處大地表迹佛迹土故也云云。

尙日如抄等モ示サレタリ

(5) 本尊の意義

一　三寶一具ノ本尊
二　十界圓具ノ本尊
三　一念三千ノ本尊
四　天地法界ノ本尊
五　日蓮主義ノ全面
六　一切經及諸哲學ノ結晶
七　一切宗教ノ本尊統一
八　一切衆生根本依止處
九　卽身成佛ノ龜鏡
十　世界人類最後救濟本尊ナリト拜ス

(6) 文明の要素

(イ) 大哲學に基する文明

曼荼羅本尊ハ一念三千哲學ヲ基礎教義トシテ建立セラレタルモノナリ

日蓮聖人曰ク一念三千ヲスリカタギ立タル本尊ナリ云云

東西兩洋ノ哲學蘭菊美ヲ競フト雖モ、曼荼羅本尊義ヨリ之ヲ觀レバ、其一部若クハ半面ニ過ギサルナリ、此本尊義ハ宇宙觀、世界觀、人生觀國家觀、社會觀、道義觀ノ一切ヲ具備統一シタル輪圓ノ本尊ナリ。

眞ノ文明ハ此義ニ依準セザルベカラズ

(ロ) 平等差別融合ノ文明

曼荼羅本尊ハ上佛界ヨリ、下畜生、餓鬼、地獄ノ十界皆悉平等ヲ現ハシ、而モ又因緣別ノ故ニ十界三千相、差別宛然タリ、而モ些ノ矛盾ナク、些ノ畦礙ナシ縱横ノ調節自在ノ融合也

(ハ) 物質精神調節の文明

法華經ハ資生業皆順正法ナリ、天照太神ハ躬織躬耕、躬蠶、精神ト共ニ頗ル物資ヲ貴ブ此義本尊ニ彰然タリ

(ニ) 政教致一の文明

政教矛盾ノ世界ニ何ゾ眞ノ文明アランヤ、何ゾ眞ノ理想世間アランヤ、日蓮主義ハ法國冥合、王佛一如ヲ主張スルモノナリ、一王一佛ノ意義、涅槃經、大論、持地論、文句記等ニ歷々タリ

(ホ) 民衆自覺の文明

曼荼羅本尊ハ十界皆成佛道、三千法界ヲ示スモノナリ民衆ノ自覺ハ勿論、牛馬畜類草木國土マデ自覺成佛ノ時コソ眞ノ文明眞ノ佛國ナリト示スモノナリ。

此本尊示現ノ時ヲ以テ、眞ノ文明、眞ノ平和、最尊最上ノ妙國土ト謂ツヘキナリ。

(7) 曼荼羅本尊の示現

此本尊個人ニ示現セバ、人格完成、卽身覺者ナリ、國家ニ示現セバ立正安國、常樂國土ナリ、世界人類ニ示現セバ眞ノ平和眞ノ文明ナリ、而モ破壞ナキ淨土不毀ノ娑婆ヲ現出スルナリ。

(8) 結論

世界改造、一切ノ改造ハ先ヅ此表準ヲ深ク信スベキナリ。

南無妙法蓮華經

思想の調整

成島日衛

(一)

人は常に萬物の靈長なりと誇つてゐるが、果して萬物の靈長であるらか、或醫師かあり、人と豚との潰價を蹈んたものがある、先づ此に一年なり一年半なり、豚兒を養へば、其間粗末な食物にて十八貫なり二十貫なりになつて、少くとも二十圓なり二十五圓にはなる、之に反して人間は如何といふに、絹布を纏い美食を求め、そして二十歲迄には少くとも二千圓位はかゝる此二十歲の人間の目方は十五貫で、丈が五尺三寸、潰價は十四圓二十一錢五厘だといふことである、シテ見れは慥に豚の方が人間より潰價がある。

(二)

潰價は豚に及ばんけれども、人間には慥に萬物の靈長として偉磊處がある、それは智識といふものを持つてゐる、卽ち思想である、是非、善惡を分ち國家又は社會を造り善事善行を爲すの考えがある、此智識のことに就て釋尊は涅槃經の中に「醉象は身を殺すも、惡智識は身心を殺す、故に忌なければならぬといはれてある」、實に左樣である、明治天皇の時代に幸德秋水の一黨は、社會共產主義を唱へ、大不祥事件を惹起し、其結果峻烈な裁判を受て、遂に彼等はあはれはかなくも、身心共に絞首臺上の露と消た、身から出た錆だ如何んともしかたがないが之は實に好實例である、又惡智識は魔の眷屬なりともいはれてある、魔とは梵語、魔羅で……漢語に殺心といふ、卽ち善心を殺すものである、故に忌むべきは此惡思想である。

(三)

此惡思想が國家に及すと却々容易でない、歐洲戰爭後、デモクラシーといふ主義か、大分天下に高唱せられつゝあるが、要するにデモクラシーの根本精神は自由と平等といふことである と思ふが、此主義には、國體上デモクラシー、政治上デモクラシー、社會上デモクラシー、文化上デモクラシーなどがあり、學者達は、民主だ民本だといふて隨分名前が澤山あるようである、彼の菅原道實は『和魂漢才』といつたが、自分もさうありたいと思ふ。此に梅の木がある此木なり枝なりを鉢又は花瓶に愛翫せんとするに、其梅を忘れて如何に鉢や瓶が美しくとも、心をやつすものがあつたら、これは冠履轉倒の大馬鹿者である故に、明治天皇は

よきをとりあしきを捨てゝ、外國におとらぬ國となすよしもがな

と仰せられてある。

(四)

前に一寸自由と平等といふことをいひましたが、然しこれは果して吾人が一般に物質的方面に要求せらるゝものでありませうか、彼の秋水等か唱へた共產主義である、成程、共產主義といふと如何にも快く聞えるのであるが、假りに此處に十萬圓の金があつて、之を千圓宛百人に分配する、而し勉强にして貯蓄心のあるものと又無いものとでは、大に相違がある、不勉强にして酒色に耽る奴は必ず借金か何かして取られる、故に此主義はなか〳〵滿足に行ふことは出來ない、寧ろ國家の秩序を亂し大なる弊害を生ずるものである。誰やらの語に『眞の社會主義を味はずして、共產、無政府の思想を抱くものは……更に一歩を進むれば、共產の思想は共妻となり、無政府主義は暗殺主義となる』とある、現に露國の皇帝暗殺とか女子國有の如きは、好模範ではあるまいか。

(五)

此に一つ自由と平等といふことに就て、譬喩を擧げますが、彼の扇子と提灯とは同じく紙と竹と糊で造つたものである、此方面は卽平等面である、然し扇子には扇子の能がある、提灯には提灯の能がある、これ差別面である、此差別と平等の圓融を說いたのが佛敎哲學の勝れた所以である、今日の如く講演でもして暑い時に扇子を持つて煽けば、淸風徐に吹き吾襟懷を廣くするに足るとか、又は象山の『白扇倒懸東海天』など丶詩でも唸すれば大相心地がよい。然るに扇子の代りに提灯を持つて來いといふたら大笑ひでしよう、人も又それと同じく、世界の人間均しく人間なれとも、其間には日本の人民あり英國の人民あり、米獨又然り、又同じ人間にしても男女あり、主從あり、兄弟あり夫婦あり、故に此間の消息を能く理解して、其能力に應じ、神なり佛なり、聖人なり君子なり政治家なり文學家なり、佛性卽ち向上性を有つてゐるといふ點に於て眞の平等なり自由なりといふことが絕叫せらるゝのである。

（六）

ソコデ國家といふものは、土地、人民、主權者の三か備はれば國家だといひますが、吾國は天照大神の勅に『葦原千五百秋之瑞穗國。是吾子孫可レ王之地也。宜爾皇孫就而治焉。行矣。寶祚之隆。當與二天壤一無二窮者矣。』とある如く外國の如うに水草を逐ふた牧羊人民によりて出來た國でなく、最初から烈燄とした『王』があつて、人民と國を治めて來たのである、而して他民族より一度も侵略を受けたことがない、獨乙にしてもナポレオン第一世の爲に侮辱を受け、佛蘭西は獨乙の爲に侵略せられて城下の盟を爲し、墺地利も獨乙の爲に酷い打擊を受け、露國はナポレオン一世の時には兎も角モスコーまで攻入られ、日本では前いふ如く左樣ではない、故にデモクラシーは攻略、侵伐、甚しい國の主義で、金歐無缺の吾國に用ゆべきものでない、それはデモクラシーだ、名は實の賓た、先つ其名を忌むべしともいはれてゐる、要するに家には家風がある如く、國には國風がある、故に日蓮上人は『彼の國によかりし法なれはとて、此國によかるべしとは思ふべからず、法は先づ其國を鑑みて弘むべし』と仰せられてある、而して四恩といふことをいはれて、『世に四恩あり之に報するを人倫と爲す』とある。

（七）

四恩とは何であるか、一に父母の恩＝個人主義、二には衆生の恩＝社會主義、三には國王の恩＝國家主義、四には三寶の恩＝世界主義＝である、此事は日蓮上人の御遺文四恩抄や、心地觀經、報恩品等に委しく說いてあるが、この四恩に就ては輕重がある譯でなく、只その所對によつて方面を異にする計りで、國民が國家に對しては國王の恩が第一である、日蓮上人は『天の三光に身を暖め、地の五穀に神を養ふ皆是國王の恩也』といはれてある、然るに往々超國家等といふ思想に囚はれて居る人があるが、これは一面を見て他の一面を見さる痴人で……勅語に『之を中外に施して悖ず』とあるが、卽ち國民道德は世界の人類が守る人道主義とは矛盾してゐないといふことで、差別卽平等といふのはこゝのことである、これ吾が國民道德と佛敎の勝れたる所以である。

（八）

同じ國民道德を守り、君に忠義を盡すにしても、佛敎を信じると否とに依つて相違がある、彼の出師の表を讀んで諸葛孔明の忠節に泣ぬものはないといふが、『臣鞠躬、力を盡して、死して後已む』とて、蜀の天子に事へたのは現在的であつた。然るに彼の補公は如何、後醍醐天皇には奈良へ行つたけれ共、此處にも北條の一族がゐるといふので、藤房、秀房二人を召連れ、笠置山へ逃れ松の木の下でトロ〳〵とお眠りになり、其時『さして行く笠置の山を出でしより、天か下には隱れ家もなし』と詠ぜられ、藤房は『いかにせんたのむ蔭とて立よれは、猶袖ぬらす松の下露』と涙で和せられ、主從三人、正成を訪んとせしも、尊氏の爲にあざむかれ、十五回、刀折れ矢盡き、兄弟耦死する時、正成曰く『死して後如何と、弟正季曰く『七度人間に生れて國賊を亡ぼさん』といはれた、これ

佛敎を信じ三世因果の道理を知り、生れかはり死かはり忠義を幾度も盡さうといふことで……永久不滅の信念に住したからである、日蓮上人は、如何に强敵重なるとも努々退く心無れ恐る心無れ、縱ひ頭をば鋸にて引切り、胴をば稜鉾を以てつゝき、足にはほたしを打つて、きりを以て捫むとも、命の通はん程は南無妙法蓮華經々々』と仰せられた。

（九）

民力涵養といへは只チヤガラ芋を喰つて金を溜ることのように思ふものであるだろうが、それは大なる間違ひで――これを個人に比すれば、身體も强壯に精神も旺盛にと云ふ如く、國家も同じく物心の健全なる國力を養ふといふことである、只物質的方面のみでは眞の國力を養ふことは出來ない、彼のローマの全盛は歷史に喧傳せられてゐるが、國民の思想か空虛であつたから遂に亡びた、往昔、一商人あり、渡航せんとして幾多の貴重品を靴に入れ乘船して行くこと數十里、偶々浸水の爲船將に沈沒せんとす此時自己の靴を抱き夢中に驅せ廻りしも、遂に靴と死せりといふ話があるが、これ船の堅不堅を撿せさるが爲である、國民としても先づ個人の生命、財產を安全に保障せんとすれば、其國家の安立を計らなければならぬ、今度の歐洲戰敗國の悲慘な狀態はこれを物語るものであろう。

（十）

以上述るが如く、國民の思想如何は、國家の盛衰興亡に關す、故に此際吾々國民は、超國家などといふ廣汎な意味に囚はれないで、國體國風に適する思想を大に調整涵養することが急務である、彼の國際聯盟など丶いつてもこれは羊頭を揭げて狗肉を賣るもので米國はモンロー主義を唱へて支那に資本を投じて東洋の富源を奪はんとし、英國は海軍はわが生命なりといひ、蓋を開けて見たら貪慾のフヒルムであろう、彼の象山の語に「他を呑噬する程の力なければ、他の呑噬を免れず」とあるが如く、吾が國は五大强國に列しても國力といふものが增進しておらければ、他の呑噬を免れない、人種問題も成功しながら撤廢になつたのはこれが爲ではあるまいか、畢竟日蓮上人か立正安國論を遺られたものこれが爲である。

『所詮、天下泰平國土安穩は君臣の樂ふ處、士民の思ふ所也、夫れ國は法に依つて昌へ、法は人に因つて貴し、國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法を誰か信ずべき、先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし』（安國論×講演大意）

他の呑噬を免れず」とあるが如く、吾が國は五大强國に列しても國力といふものが增進しておらければ、他の呑噬を免れない、人種問題も成功しながら撤廢になつたのはこれが爲ではあるまいか、畢竟日蓮上人か立正安國論を遺られたものこれが爲である。

『所詮、天下泰平國土安穩は君臣の樂ふ處、士民の思ふ所也、夫れ國は法に依つて昌へ、法は人に因つて貴し、國亡び人滅せば佛を誰か崇むべき、法を誰か信ずべき、先づ國家を祈りて須く佛法を立つべし』（安國論×講演大意）

機微譚話

山根青村

九三、直江兼續

直江山城守兼續は剛愎にして終身人に屈することなかりし人なり、一日伊達政宗異國の錢を取出して之を家康の見覽に供す、家康見終りて之を列座の諸大名に示し、諸大名見廻して直江山城に渡しけるに、山城扇子を開きて之を受取り手に取らざりければ、政宗謙退なりと心得、直ちに手に取りて見らるゝも苦しからずとありしに、山城眼を張りて政宗を睨み、斯る穢はしき品は景勝に代りて數萬の軍卒を指揮する拙者の手に觸るべきものならずと、憚る所なく言ひ放ちければ、家康すかさず、山城は如何にして大便を拭はるゝやと問ひ詰めければ、流石の直江も答辭に窮し其場に平伏したりとぞ。（逸話文庫）

一を知りて二を知らざる偏僻者は、得てしてこの直江の亞流となるもの。軍人は金錢に淡きを旨とし子孫の爲めに美田を買はずと迄はよけれども、何日も大體服を一六銀行へ預け放しでまさかの時に假病缺席も讃めた談ではなし、さり迚また慾の皮の突强りて軍艦を喫り馬糧を喰

ふに至りては、是亦沙汰の限り共面に唾すべきなり。僧侶も亦厚沙彌訓流に、佛子黄白を手にするは禁誡よとの餘に聖僧氣どりもあてにならず、さり迚又二口目には世路難を叩ちて、談牧入の多寡をしば〳〵するに至りては、眼を閉ち耳を掩はざるを得ず。教義の造酢に至りても亦然りで、餘りに一經一論に固執して綜合の識見を缺ける僻說は聞くに堪へず、さり迚餘りに融通がきゝ過ぎて、糞も味噌も共一の無骨駄論は是れ亦御免を蒙りたし、要は偏せず當せず開顯統一の中心點を把握して、萬人をして信仰の依止處を得せしむるに足るものを所希するなり是れ現代及び將來の國民が要求する所なり。

聖語、日蓮は何れの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず。（妙密上人御消息）

九四、車力の掛聲

皮肉文士正直正太夫本名齋藤綠雨先生、曾て芝の聖坂に道遙して車力の掛聲を聞き、思はずアツと感服せしとかや。幵は他ならず、急坂を攀ぢ登る由來空手猶ほ且つ難しとする所、豈たゞ老幼婦女子のみならん、況んや重荷を累積せる荷車を牽けるに於てをや、さてこそ所謂車力なるもの其掛聲に呼吸あり、一人で「ナンダ坂」と呼べば、後押の相手方は「コンナ坂」と應ず、斯くて何ニ糞ツ斯ばかりの坂がと云ふ、勇氣を鼓舞して美事嶮坂を登り了する也と。

吾人現代に處してあらゆる俗惡と戰ふ、一日も惡戰苦鬪の勇氣なかるべからず、寸毫だも悲觀退嬰を許すべきやは、由來國運の發展は棚から落ち來る牡丹餅にあらず、國民元氣の充實が生み來る菓實なり、進んで取るの勇猛精進を要する勿論ならずや。さらばよ諺げん日蓮主義は奮鬪主義なり、厭世念佛の引込主義と正反對なり。

聖語、日蓮が弟子等は臨病にては叶ふべからず。（教行證御書）

九五、懺悔清淨

織田信長の時代に柿次郎右衛門と云へる浪人あり、身の有附を考へて關東より上方への旅の空、一人の僧と道連れとなる、僧は京都東山のもの、御堂建立の爲め關東に下り奉加金二百兩募集濟の旨を語る、次郎右惡心起り濟まない事だが其丈の金だにあらばと、桑名の渡船場にて僧の舟べりに小便するを見すまし、不慮に後方より其足をとりて水に突落す、十分に帆を揚げたる舟は其儘走りて知る人更になく、まんまと包裝の金を奪ひ取りて大坂に奉公口を求む、覺へある武士の事とて二千石の侍となる。一日庭園を眺めつゝ往事を追懷し重罪の先非を悔ひし折柄、勞鬼として其僧眼前に現はれ次郎右をハツタと睨みたり、斯くて其場より大熱病の苦悶悚惱、名醫の投藥も高僧の祈禱も更に其効驗なく、妻子眷屬心痛の折柄、旅の僧その病人愈し呉れんと祈禱を申込み來る、兎も角もと病室に請じたり、次郎右入り來る僧を見れば何ぞ圖らん先年我手にかけし僧なり、是はと計り驚く次郎右を制して旅の僧申す樣、否とよさな恐れ給ひそ、我れ其時入水せしも水心を知りし身の死を免れ、再び關西に行きて本加を仕直し、無事に御堂を再建し畢せたり、爾來五年願望既に成就の身は舟に對する怨恨更になし、此處で廻り會ふも何敵の因緣、舟も立身世出此上なし、いさや妄執さらりと捨てゝ今後兄弟の約束せんと、酒脫の言分に次郎右妄執の夢忽ち霽れ、病愈へて二百金を返戻し、爾來劍類の交りをなしたりとぞ。（廖安太平記）

成効を急ぐもの自己が歩みの正否を考ふるの餘地なく、「大功は細瑾を顧みず」杯勝手の理屈を揑し上げて、人を押しのけ突き飛ばし、首尾よく立身出世の岸に泳ぎ着いたものゝ、又手半夜人都りし萬籟寂々燈火明滅の處坐ろに行越方を回顧して、衷心疚しきものなからずや、自己の造りし罪惡に責められ苛まれ、苦悶懊惱東に馳せ西に奔りて迷妄の狂態を演ずるは定の事、懺悔滅罪の勝妙行を修するにあらずんば、此苦此惱み到底拭ひ去るべくもあらず、更に擴充して考ふれば、我等無始久遠の乃往、父子の關係を無みして大恩ある本師釋尊に背反し奉り、見思塵沙無明の煩惱重疊展轉、背佛謗法の罪過を重ねて墮落又墮落、三惡四趣の輪廻すること幾萬億回なるを知らず、今や幸にして末法妙受生の幸榮に浴し、元品の無明を切る大利劍生死の長夜を照す大燈明たる妙法に値遇し奉る、何等の幸福ぞや、宜しく懺悔大懺悔して即便服之病魔除愈の眞人間とならざるべからず。世尊はの給へり斯子惡むべしと、吾人發奮なと是眞佛子の自覺反省なかるべき、懺悔なる哉懺悔なる哉、南無。

聖語、大石も海にうかぶ船の力なり。大火もきゆることと水の用にあらずや、小罪なれども懺悔せざれば、惡道を免かれず、大逆なれども懺悔すれば罪きへぬ。（光日坊御書）

力産會發會式

統一閣
十月十七日午後正一時より
本多日生猊下
數番

場所
日時
講演
餘興

○和歌

『暮村』は選者閣下の都合に依り次號掲載

□次號課題

山中時雨

『湯婆』

日ねもすを慈顏の祖母に湯婆哉　石橋芳夫
たんぽこほす窓に月あり局寮　三江
氣つかはる母の湯婆や鶏の聲　夏目蓮水
酒の氣のあらで用なきたんぽ哉　長尾直水
强情も折れて親しきたんぽ哉　原琴友
新らしき湯婆買ひけり病上り　岡本靈谷
ゆたんぽや隣に嫁の小言あり　立川金峯
毛布團へ湯婆を入れて待夜哉　山中慶山
老母逝きて今年つめたき湯婆哉　有田麗湯
湯婆抱て見る白晝像の夜半哉　西澤明花
疑問の小包あければ湯婆なり　山根青村
夢深く湯婆程よし絹布團　堀江溪狸
湯婆を抱きし病父や冬の月　かね女
父起きて子供のもぐる湯婆哉　同人
湯婆の水霜匂ひゆく水仙まで　永橋晩江
湯屋の湯を湯婆に貰ひ來る寡婦哉　同人
▲御威や恭々しく湯婆捧げ行く　鼓城

『枯蓮』

神池の水に月あり枯蓮　成東狸溪
枯蓮にうがひの水のかゝり鳬　同巴詩女
枯蓮や雞岐額づく天女堂　淺草書村
枯蓮や和尚嚔する大書院　同人
枯蓮の中舟みちに家鴨かな　市外明花
丹餘の橋下蓮は枯けり倒不二　同人
蓮枯れて廻廊に出る狸かな　同人
枯蓮や池一ばいのくの字哉　京都麗陽
枯蓮や寺門前の濁酒店　淺草慶山
蓮枯れて池七丁の寒さ哉　白山かね女
野鳧や枯し蓮葉を傳へ行　淡谷金峯
枯蓮や赤き蜻蛉の力なさ　神田鉢山
暮鐘響き枯蓮は水に沈みけり　牛込晩江
風に動く朽舟折りし枯蓮哉　同人
枯蓮の風を無言にきく夜哉　千葉鷺谷
大御代に釣魚の餌や枯るゝ蓮　丹波琴友
枯蓮の池の邊の納屋の影　高岡雲峰
枯蓮や朝經聞ゆ寺の庭　大阪直水
蓮枯れし池に山門映りけり　千葉蓮水
蓮枯れて塞のみ高し係爭地　上總三江
枯蓮に鳥一つ來ぬ小池哉　出雲芳夫
▲枯蓮や雪踏む人影男　鼓城

△次號課題

田中實氏の質疑に答ふ

（一記者）

日蓮聖人の教義たる「法界即ち宇宙の諸現象は悉く本佛釋尊の理智悲三身の發現にして一大道德的活動躰なり」と云ふを信奉せんとするに當り左の疑議を如何に解決すべきや

▲一問▼　宇宙に一大眞理の活動せることは疑なきも其の活動の法則たる全く機械的にして無情なるものなり人と國とを問はず榮枯盛衰は道義的善惡に因らず專ら力の競爭に因るは爭ふへからざるの事實にして之を本佛悲念の發現と解すること難し

△答▽　宇宙法界の本佛悲念の發現と見るは其根本宇宙觀に於て森羅萬象は一念三千の當躰にして平等不二なりとの原則の上に心、佛、衆生の三法何れを中心としても無差別なりと說き天台は已心中心の一念三千論を立て日蓮聖人は佛陀中心の一念三千論を主張せられたものである本佛を中心として宇宙を觀察するが故に宇宙の森羅は悉く本佛慈悲の一念に具有せらるゝ三千の諸法と解したのであるが、然ればとて宇宙の全躰が本佛の意の儘に動作し得るとは言ひ難く何故となれば宇宙には本佛の意志に戻り實相に逆ふて自家を擅にせんとするものがあるからである、玆に佛陀の慈念に順應し來るものと反撥し去るものとあることを認めねばならぬ、順應し來るものは本佛の慈念の中に攝し得るも反撥し去るものは之を攝するとは出來ない、原理としては一切衆生皆妙法の當躰として本佛の慈念の中に攝せらるべき筈なるも事實上には順應せざる者は攝せられざるのである、聖人當躰義抄に曰く問一切衆生悉く妙法の當躰ならば我等の如き愚痴闇鈍の凡夫も卽妙法の當躰なりや答當世の諸人之多しと雖ども二人を出でず所謂權教の人實教の人なり而も權教方便の念佛を唱ふる人は、妙法蓮華の當躰と言はるべからず實教の法華經を信ずる人は卽當躰の蓮華眞如の妙躰也云々妙法に順應するものは妙法の當躰なるも順應せざるものは當躰にあらずとの見解である故に我等本佛の慈念に感孚し順應し得るものゝみに於て宇宙を本佛慈念の發現と解し得るのである

▲二問▼　宇宙の現象には矛盾衝突あり日蓮聖人か念佛宗等を破折し其の絕滅を圖られたるも彼等は絕滅するに至らず中には愈々繁榮を示すものあり如斯は明かに矛盾なり普通の觀念を以て觀るときは日蓮聖人をして本佛の發現なりとせば其の意に反する念佛宗等の繁榮は本佛の發現なりとは謂ふべからず然れども一切の現象悉く本佛の發現なりとせば此の矛盾の事實も共に本佛の發現なりと謂はざるべからざるべし本佛は何故に斯かる矛盾を發現するか

尙吾人の如き惡人愚人の存在も亦本佛の發現なりと謂はざるべからず本佛は何故に斯かる惡人愚人を發現して自他動的苦惱を受けしめ一方に於て故らに之か拔苦濟度に力を盡す等の矛盾を爲すか一大疑問たり

△答▽　宇宙に本佛に順應するものと反撥するものとする以上は矛盾あるが如き事象は當然あり得べき事柄なるを以て順應せるものは反撥せるものをして覺醒せしめんと努力する次第なり

▲三問▼　本佛の躰は絕對普通なりと承はる畢竟哲學上所謂「實在」に外ならざるべく而して現在卽實在の觀念を以て觀るときは現象は悉く本佛の躰にして吾人衆生も本佛身躰の一部なりと云ふに歸着す元來本佛は濟度者にして吾人衆生は被濟度者なり然るに吾人衆生も本佛の一部なりとせば玆に濟度者被濟度者の區別を沒するに至るべし故に濟度者たる本佛は被濟度者たる衆生を除外したるものならざるべからず濟度者たる本佛は宇宙間の一部に局限せるものならざるべからざるの理ならずや了解に苦む所なり（若し吾人を悉く佛に沒入して佛の外に吾人なし吾人の爲す所は皆佛の爲す所なりとは謂はゞ右の疑問は氷解すべけんも斯くては絕對他力教と爲るへし）

△答▽　本佛の躰は絕待普遍なりと雖ども其普遍の本躰なるを忘却して自ら迷界に墮在せるも卽ち吾人なり吾人は本佛の愛子として本佛慈愛の御中に愛撫せらるべき因緣ありと雖も我父を捨て遠く他國に逃るものなれば玆に自ら覺醒して佛子なるの自覺を喚起し其本躰に立還ることを要するものなるを以て救濟被救濟の能所關係は發生するものと思ふのである

▲四問▼　本佛は無作三身の如來にして無始の始めより功德果滿の佛なりとせは其の發現（又は其の躰の一部）たる吾人も始めより功德果滿者たらざるべからざるの理なり然るに吾人は如何にして修業を必要とする迷界に降下せしか其の動機不明なり

△答▽　吾人を本佛の發現として認むることは本佛に順應して其本躰を自覺したる上にて之を許し得べく無明の酒に醉ふて自己の本能を自覺せざるか爲め現に迷界に彷徨する吾人なれは本佛に順應し其本能を自覺せんが爲めには修業を要すること勿論なりと信ず

▲五問▼　無作三身を推究するときは結局無修證の理佛と爲る吾人の尊ふ所は印度出現の修德佛にして應身の釋尊なり理論に於ては一應根本に約して始覺卽本覺と說き本表の功德果蜜を是認せらるゝ樣なれども再應現實の上より觀るときは始覺前の佛力と始覺後の佛力と同一に觀る能はず例へば山中の荒木と大工の手を加へし用材との差の如く木の本來は同一にして作用は全く異なれるが如し然るに殊更に無作三身を力說せらるゝ所以如何

△答▽　無作三身とは常住實在の本佛を云ふものにして無修證の理佛にあらず我等が信ずる本佛世尊は無始已來常に此娑婆世界に在て說法敎化して所作佛事未曾暫廢の活動無限の修在の本佛なり法華經壽量品に說きたる本佛は無實證の佛にあらずして久遠劫來實修實證常住果滿の佛陀にして應用竪に三世に高く化功橫に十方に通じ應化無窮の大世尊なり日蓮聖人壽量品の應身顯本の經功を論して一切經の中に壽量品ましまさずは人に神の無からんか如くにてあるべきと推賞せるは良に所以あるなり無作三身を以て無修證の理佛と爲すは天台理觀の說に泥したる僻說なり去暦昨食の日蓮主義に於て採らざる所の說なり

風呂吹○水涕（みづはな）

松尾蕉城先生選

月次句集（上總中島本永寺にて）

○天　位

泉水に鯉の浮きけり萩の散る　友　交

▲評　ほろ〳〵と水面に萩のこぼれて碧潭眞鯉の餌とや誤りぬらし

○地　位

すき透る鹿の聲きく廣野哉　貴　山

▲評　深山なだれの廣野になん遙に透し來る鹿の聲は旅人の腸をしぼるなべし

○人　位

鐘をつく小僧縮みて秋の風　一　昌

○協　席

ふつさりと伏猪床らし萩の花　正　齋

○秀　逸

門際に立ちとまりけり萩の花　新　友

籬目やほろゝこぼれし萩の花　春　淨

伸べし手の引きもかねたり野萩哉　樹　竹

撫でゝ見るかしらいたはし秋の風　紅　葉

苦しめる石燈籠や萩のちる　妙　風

秋風の吹いてかはるや山姿　貴　勝

檜ゆくや身をかたくして秋の風　一　昌

○入　選

空はすみ稻は色見へ秋の風　麗　水

旅なれぬ宿に寢さめて鹿の聲　樹　竹

鳴聲にさびしさをます雨の鹿　一　昌

春日野は懷ろ廣し鹿の聲　一　遊

淋しさをいやます鹿のくれにけり　妙　風

しと〳〵と雨にくれにけり鹿の聲　同　人

波先の笑ふてくるや秋の風　東　里

○補

殘月や木ぐらやみして鹿の聲　選　者

△富士川博士に質議を呈す

高岡市立教育會員　畠山友次郎

謹で富士川博士に質す　博士は去る六月廿七日富山縣高岡市々立教育會及修善會合同主催にて市内商業會議所に於て『眞實の宗教』の題下に於て講演されたるところ、其要を摘んで之を云はゞ『眞實の宗教は文字の通り淨土眞宗に限れり』と、而して更に曰く『元來佛教には眞宗教と假設教とあり、淨土教は眞實教にして他教は方便假設教なり、中にも觀無量壽經は眞實中の眞實經なり』と云々

右に就て予は今博士に對つて質議す。博士の說の如きは反て日蓮主義者の述べつゝある所にして我等には佛教の本據に任せて之を主張するの理由あり、然るに博士は觀無量壽經を眞實中の眞實經と主張さるゝには如何なる佛典の本據あるや明示されたし、我等は先師以來斯經の如きは却つて方便假說として斷定論破し來りたるものにして、法華經とそは眞實中の眞實經として歸依し來りし所なり。されば貴說は我等の信條と反對し衝突す。故に博士は學者の態度として明瞭に佛說を示し其理由を公表せられんことを冀ふ。涅槃經に曰く、依法不依人、天台曰く文なき義なきは邪說なりと。但し彼の論斷は只博士が漫然たる一個の私見なるか。何れにても返答を請ふ

博士は又曰く、佛に事理の二佛あり、阿彌陀佛は事佛にして他佛は理佛なりと云々。我々の見る所に於ては阿彌陀佛は畢竟は釋迦尊の說教上に顯れたる佛にして阿彌陀佛こそ博士が所謂理佛空佛にして本師釋迦牟尼佛こそ眞實事の本佛なること明か也、若し然らずとせば佛典に依りて證文を示されよ。本誌は特に博士の手下に一本を送呈す。

統一團報

◎總裁猊下訪問と幹事會

統一團幹事は、昨夏品川妙國寺總裁猊下を訪問し、平素の御教訓を感謝し、御健勝を祝する事とせしが、今夏も亦此の例に倣ひ、去月二十七日午後一時品川驛附近茶店に集合し、直ちに電車にて妙國寺へ參集す。少時休憩、猊下には井村僧正、松尾、高木、長谷川諸師と御寶前に法味を捧げられ、幹事一同先道禮を新られ、終りて猊下より一場の調辭を賜はり、將來に於ける日蓮主義宣傳の必須を期せらる。やがて大廣間にて清奏を供せられ、獻酒數行の後、吉田珍雄氏謝辭を述べ、小島傳平氏、陛下の萬歲を三唱し、猊下の健康を祝す、松尾義城氏は妙國寺の由來を說明し、今更に其の感興を深うする事を得たり。當日の參集者左の如し。

吉田　珍雄　小島　傳平　山田　英二
坂木　泰造　川島　松雄　亀井　利一
中村　光三郎　幅　攻吉　水野　三太
早川　太吉　中澤　平五郎　五十嵐　正
田村　佐太郎　中村　壽市　時友　仙次郎
久保田　雅巳　勝田　茂　內海　順二
藤澤　智明　本橋　利一　鈴木　金藏
大原　亮　竹下　龜二郎　山田　豐次郎
矢野　滇子　久富　久子　高橋　長二
加藤　寅五郎　島田　惣五郎　後藤　秀太郎
妹尾　義郎　野島　速平　寺田　貞二
玉川　由太郎　外　玉川夫人　日比谷刀自の加

はれるありて盛會裡に薄暮散會功德甚多南無妙法蓮華經（寺田貞二報）

◎常總統一團の獅吼

◎府馬講演　（野澤將軍の一行）本團總裁本多猊下の出張を屈請せしも、多忙の故を以て野澤將軍出演することになり、九月十九日、野澤少將　成島布教師は午前十一時半、下總旭驛着、赤塚先生、星野氏等の出迎にて、旭樓少憩中餐の後。一同自働車を驅せて、曾て鐵牛和尙が開鑿せしといふ千潟八萬石の田圃を横斷し、府馬修德院に到る、修養會長平山三藏氏其他幹事等諸氏出迎にて、午後二時より講演

開會の辭　修養會長　平山　三藏
思想と國家　特命布教師　成島　日衛
新思想と日蓮主義　陸軍少將　野澤　悌吾

午後六時閉會、晚餐會を府馬樓に開き、有力者十有餘名相會し、種々教化上の問題に花を咲せ、平山氏は「彌陀と本佛」との關係に就き質問を爲したれば、將軍は佛教の根本義より說起し、諸佛と本佛との關係を委に說明し、大に滿足を與えたり、而して翌二十日。

◎婦人講演　信仰の力　成島特命布教師
婦人の力　野澤陸軍少將

午前十二時閉會、聽衆前日四百、本日二百、盛會なりき。

◎森山講演　（民力涵養）、午後一時、府馬諸氏に別を告げ、森山より谷本嘉三、菅谷、關氏等自働車を以て出迎へらる、直に一同之に乘じ、森山小學校に向ふ、中島村長、篠塚校長、青年團員等出迎へられ、午後二時より講演。

開會の辭　篠塚校長
國民の自覺　成島特命布教師
民力涵養の根本義　野澤陸軍少將

午後六時閉會、暮靄を衝き、河水橫溢の道路を篠塚校長、谷本氏等、自働車に同乘、小見川町角隅樓に到る同夜一泊、本日聽衆四百餘、是又盛會。

◎城山公園講話　二十一日、利根沿岸風光第一と稱せらるゝ同町公園を訪はんと、所有者たる貴川氏に此旨を通ずるや、大に悅ばれ、午前十時、出迎へらる、於此乎、故貴川虎之助氏菩提の爲、成島師は一返の回向を爲し、又野澤將軍は、老刀自並に家族一同の爲に、法華經の尊貴なること、信心だに强盛ならば必ず功德を得るゝことを、勸發品の四法成就と、六波羅蜜の文と『燈鎭爐』の譬を擧げ、玄題の功德にて一切の煩惱、業障消滅することを懇切し、一同に法悅の涙を浮べしめ、將軍は記念の爲。『刀江第一峰』の額面を揮毫して贈られたり、それより腕車を驅せて小見川小學校に到る。

◎小見川町講演　（地方改良）　石毛町長、寺木校長等の出迎にて午後二時より講演。

開會の辭　寺木校長
國民の修養　成島特命布教師
國民的信念　野澤陸軍少將

午後六時閉會。聽衆五百、盛會、休憩中、寺本校長より『宗教と道德』とに關する質問あり、將軍は優婆塞戒經の『勝なき給藏の如し』の文を引き懇說せられ、玄談盡ざるも既に時間も切迫したれば、惜しき別を告げ、自働車に乘じ、佐原町に向ふ、木內樓に到着せしは七時半。

◎佐原議事堂講演　松浦先生、菅野、阿部、齋藤諸先生、並に伊能、鍬形、鈴木等修養會員諸氏の出迎を受けたり、然るに平素修養的方面に訓練せられたる町民並に會員は、既に滿堂立錐の餘地もなく鶴首の狀態、於此か、直に晚餐を爲し、早々開演。

開會の辭　修養會長松浦忍
思想の調整　成島特命布教師
新思想取捨宣傳の標準　野澤陸軍少將

數日來の講演に將軍はひるむ氣色さへなく、到處探卷に應じ、當夜の如きは更に一段の勇氣を加へ、或はデモクラシーの批判を爲し、或は國體を論じ、或は綸旨問題を論じ、或は人種撒襄案を難し、或は文明を論ず歐洲人は一本のペンにて國土を分奪したりと實例を示し、或は耶蘇教徒の朝鮮、支那に於ける偏動的奸策等を詰難し、最後に日蓮上人の遺文を引き、國民として體を忘れ惡平等の思想に囚はれ、國家を忘るゝか如きものは一大事也と、急調激越の口調を以て、滔々數千言、滿堂宛も水を打ちたるが如く、一聲一喝、深刻なる感動を與えたり、午后十一時半閉會、聽衆六百餘。

翌二十二日、將軍は松浦、菅野等の諸先生並に鍬形、鈴木等諸氏に見送られ、佐原午前六時發にて歸東せられたり。

既に新紙の報するが如く、利根河水氾濫、交通不便なるにも拘らず、十二分の効果を收め得たるは、是偏に各地諸氏熱誠の賜と深く〳〵感謝の至りに堪えず。南無。（團末）

◎統一閣

▲日曜定期講演會

七日（夜）晴　聽衆三百、甘露の涙を高木本願。本門の本尊を井村日成。○十四日（午後一時より）晴　聽衆六百、龍口の法難を妹尾義郎。世界國民懺悔時を野口日主。立正觀鈔講義を本多日生。○二十一日晴　午後二時より彼岸會の法要を營み、了つて開講、信仰の內容と形式を關田日城、立正觀鈔講義を本多日生。御供物頗與。聽衆堂に滿ちて法樂外に溢る。○二十八日晴　聽衆六百、鎌倉時代と日蓮聖人、長谷川義一、本門の題目、井村日成、一念三千、本多日生。

▲統一閣附屬諸會

△每日曜日、午前は子供會を、夜は青年會法華經講義例會を開く。

△地明會、十六日午後二時より本多猊下御師のもとに參會の善女四十餘名讀經唱題。次いで直書要文の御講義了つて茶菓の饗あり。

△夜講例會、九日、神田信道會長谷川義一、妹尾義師郎二氏出演。○十三、本郷正道會、川島松雄氏、野澤少將出演。○十五日、日本橋久保田氏宅、長谷川義一井村日成二師出演。○十七日、神田三崎橋、中澤氏宅妹尾、秋山乾英氏出演。同夜野澤陸軍閣下宅坐談會。○十八日、本所小松崎氏宅小松崎氏、井村日成師出演。○二十七日、小石川、後藤氏宅、妹尾、野澤少將出演。同夜、本所川島氏宅長谷川、井村二師出演。

夜講の成績見るべきものあり。熱信家の開講を望む。

▲義納芳名

△統一閣少年會へ
金壹圓也　平木楊三、同誠一郎殿

△統一閣布教部へ
金壹圓也　石井清一郎殿
金貳圓也　橫井　民雄殿
金五圓也　前谷志見子殿

△秋季大會へ
金貳圓也　塚本丑太郎殿
金貳圓也　吉田　ふさ殿

金壹圓也　樣越銀次郎殿
金五拾錢也　林部　鶴作殿
金壹圓也　竹　内殿
金壹圓也　鳥田惣五郎殿
金貳圓五十錢也　安川　末子殿
金五拾錢也　谷口　正雄殿
金五拾錢也　大原　亮殿
金七百圓也　内海　鎮二殿
金壹圓也　長谷川寫造殿
金壹圓也　淺野　良吉殿
金壹圓也　龜井　利一殿
金貳圓也　玉川由太郎殿
金壹圓也　坂本　泰造殿
金壹圓也　小松淺一郎殿
金壹圓也　山田　英二殿
金壹圓也　木郷正道會殿
金五圓五拾錢也　地　明　會殿
金五圓也　竊田　喜平殿

▲統一團本所支部　九月廿日、本所區松坂町小松崎市郎宅。講師井村日咸師、小松崎市郎君▲廿六日尚島小梅町、川島松雄宅。講師井村日咸師、長谷川義一君聽衆六十餘名。

●京都布教通信　九月一日本山國禮會、說教、三好信道、▲二日護正會、當體義抄講讃、萩原日道、▲八日成就院婦人講、有田宏道、▲九日西洞院北村宅にて同志會の主催に付三好、久世寛照、松井行英師出席講演をなす、▲九日正行院にて婦人會、萩原日道、十二日夜明德學園にて萩原日道師の講演、▲十六日法光院婦人會、信佛及衆生、金光孝碩、▲十八日本山にて中部聯合布教部主催、開會の辭、有田宏道。國民生活と日蓮主義、京藤義應。宣發大願、上田智量。▲廿一日彼岸初日、說教、萩原。▲廿二日久遠寺彼岸會、生活と信仰、金光。▲廿三日本正寺彼岸會、現安後善有田。法話、金光。▲廿四日本山彼岸會、說教、萩原。▲廿五日大慈院にて婦人會、說教、三好。▲廿六日寂光寺彼岸會、精神訓練、金光。▲廿七日本山彼岸會說教、感恩報神、金光孝碩。

木月郁三日曜日より岡崎東天王町崇禮會に於て兒童を集め日曜學校を創む、第四日曜日には有田宏道師出席御伽話を爲したり、十月より毎日曜日に兒童の訓育をなす、この會長三好信道。

●伊豆の教況、木下勉師報　小生九月下旬中豆の方面にて開演しました、中豆は教育の程度が高くないためか、或は山村なるためか分りませんが、兎に角青年が思想方面、或は宗教方面を解しておるのが少なくて開演するに困難を感ずる位です。從つて北豆方面の青年の樣に今代の危險思想をカジツテル樣な者は見當りませんでした。邪宗教的意識を有すると思はれる點も有は非常に偏頗で強い迷信家の樣に思はれる點も有りました。一般中豆は迷信が非常に多く、然かも強く泌み込んでおります。聞く所によると、日蓮の靈蹟地で、日蓮宗大學の卒業生が盛に迷信を鼓吹してゐるとの事でした。小生は益々中豆に於いて今後迷信打破の運動をなさなければならないと思ひますが、年遺憾今年入營しなければなりませんから、今から專ら內省に勉め、入營準備をするつもりですさらば皆樣に宜しく御傳言下さい。

第一回、九月七日間宮青年會主催にて開催、木下勉▲第二回、廿三日並北倶樂部にて同▲第三回、廿四日桑村青年會、木下の外に岩崎覺敏▲第四回、廿九日榊島青年會、木下▲第五回、卅日田方郡教育青年教員養成所にて木下の外に島澤所長▲第六回、卅日川西小學校にて木下の外に青木校長。

●千葉縣青年會　九月一日味生常光坊にて講演會開催す、歸士山田鍼心、岡元教一、▲十一日上野山之郷中野蘭青年會主催、海老澤乾樹、山本貫乘、山田、長岡青應▲十七日六地藏皿木長桐山支會にて海老澤、長岡、山田、河野見中▲二十日山根支會にて齋記者出席▲二十五日國府蘆、千代丸、力丸の支會へ長岡出席す。

◎第七教區教信　八月三十一日天長祝日を以て正氣村鵜下、齋藤庄作工場にて修法、終りて小竹俊雄師の四恩報答の說、笹本巡査の勸善懲惡本義說ありて第三回を講了、▲九月九日、御門妙善寺に於て題本教會と共に一同誦で修法、終りて山主小竹、龜崎日慈、磨部乾山三師の勸信講演ありたり。

●備前通信　九月五日坪井庄吉宅。六日浦上與利宅、六日久崎鑑太郎宅。九日北川田朗二宅。十一日山室保二宅に於て長力涵爽に就て講演
△十五日婦人會、衣食住と信仰
△十六日宗教が國民に對する最善の理由
△十七日赤磐郡可眞、平松義三太宅信念の實義
△廿一日彼岸初日凡聖同化
△廿四日正傳未弘の大法(中日)
△廿七日歡喜の華(彼岸結日)

●北都金澤教況　九月廿二日金澤給坂町本長寺に於て、窪田純榮師の佛所護念▲同廿四日能美郡根上村本成寺に於て同師の世法と佛法▲廿六日天晴會にて同師の本佛を忘れたる信仰外に小島由之助氏の日蓮上人の慈悲▲同廿八日本行寺にて石橋會尊氏の例月講演何れも盛會なりき。

●久米留教報　九月五日午後一時本泰寺に於て正信會例會、正信の功德、中原通應。▲十二日本泰寺に顯本同信會を開く、日蓮主義と眞文明、中原。▲十三日天晴會を本泰寺に開く、信仰の要義、末永伍平。勞働問題と日蓮主義中原。▲十六日辻淺次郎宅に家庭講話。▲廿一日本泰寺に於て講話、悅び身に餘る、以上中原。▲廿四日同上、四恩報謝、小泉顯應。一心欲見佛、中原。▲廿六日妙經寺に於て日蓮主義傳道、開會の辭、吉見法榮。日蓮主義の本領、中原布教師。▲二十八日本泰寺に天晴會臨時講演會を開き、會員參聽の外軍人學生多數

佛教哲理の通化　中學法學士
日蓮聖人の情操　中原布教師

因に本多管長祝下御親教の反響は米城の教界に大なる警醒と注意を與へ、日蓮主義の教蔗に一新生面を開發し來れり。

●遠州教報　九月二十八日夜遠州見付町玄妙寺內四恩會講演會を開催す講師及演題左の如し。
日蓮主義の各方面　山主　山太通　葬
日蓮主義と現代　晴明會幹事　新莊疊堂
勞働問題と日蓮主義　磐田郡長　矢野恕

矢野郡長は本宗の篤信家矢野茂氏の令息にして最近郡長として赴任せられたる人なり。

▲津山教信　二と七の日は例に依り能仁一師の說教。

▲彼岸法要　彼岸中同師の說教。

▲大迫大將來る　津山男子校々堂に於て長力涵養の講演に對し閣下は現代の社會を根本的に利導するは日蓮主義の信仰に限る事を高調されたり。

▲雜報　二三夾月號に廻す▼

新築落成したる青森慈惠院

謝告

各位益々御清榮之段宗界の爲め抃舞の至に奉存候
弊院々舍新築に就き時節柄をも顧ず御補助奉請仕候處深甚なる御憐憫を以て淨財御喜捨被成下御芳志辱なく奉感謝候御高庇に依り這回上圖の通り新築落成したるは全く御同情の賜に外ならず候自今奮勵實績を擧げ御厚志に奉謝可仕謹告候也

大正八年九月

青森慈惠院
院主　鎌田申太郎

日宗各寺院御中

◎店員入用

店員十三歳より四五六歳迄の者五六名入用御世話被下度候

京都市三條通小橋西入
三法堂藤田總治

日宗法衣專門
青雲帽　帝教服　袴
飯田法衣店
京都市佛具屋町五條北
振替口座大阪六八四七
定價表ハ御申越次第何時ニても御送申上候

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年十二月一日發行（毎月一回一日發行）

第廿三年 統一 十三月號

（第二百九十七號）

日經上人三百遠忌に會して……一記者
信仰心德力の發揚……大僧正 本多日生
松尾皷城氏に寄せてネオモニズムの見地より勞働問題を論する書……伊藤延次
日蓮主義者の奮起せる勞資問題解決運動……一記者
機微譚語 九六粹菴の講書九七富有三等九八加藤清正……山根靑村
不惜身命の行者日經上人……松尾皷城

■谷より峰へ　妹尾義郎作

（一）
嶮しき坂路深き谷　日は暮れ果てゝ道遠し
休らふ宿もなく鳥の　淋しき聲も山彦も
同し音色に光なく　夜嵐のみぞ身には泌む

（二）
うたて睦びし故郷の　親同胞（ハラカラ）も戀人も
永遠（トハ）の旅路の力かは　心の闇の光かは
夜更くるまゝに大空を　仰けば崇し懷しや

（三）
今し東雲（シノメ）紅（アケ）にそみ　昇る朝日に御佛の
み影映ゆれば憂しと見し　闇の旅路も輝きぬ
いざ法華經と羽ばたきて　谷より峯へ立て小鳥

（四）
谷より峰へ立て小鳥　またな辿りそ魔の林
法々華經と高鳴きて　鷲の御山へ一筋に
國の光りに啼け小鳥　友の憂に鳴け小鳥

發行事務取扱所　東京小石川白山前町　統一編輯所
◀振替口座東京三三五三三番▶

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正八年十月十五日發行（毎月一回十五日發行）
統一事務取扱　東京市小石川區白山前町　統一編輯所

念珠ならば小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
御念珠 各種
幣店の特色は實用を旨とし從來調進仕り候へば多少に不拘御用命願上候
京都市寺町通蛸藥師下ル
念珠商 小野嘉助
電話中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

布田 眼の藥 効能、たゞれ目、かすみ目、ほし目、くもり目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホーム等
定價壹瓶、拾五錢、廿錢、卅錢、五十錢、七拾錢、壹圓

布田 血の藥 定價二包入拾五錢、十五包入壹圓、効能、男女ちの道、產前產後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣絕、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪
千葉縣山武郡源村上布田參百番地藥王寺
布眼藥 田血の藥 本舗 齋藤日章
（御注文は總へて下記振替に）
（振替東京第六七九一番）

日蓮各宗 寺院 御僧
法衣 草木 直に御聯想下され候儀に候
京都 草木本店 三條通烏丸東入ル町
電話中七三五番
振替口座東一一五五九番
東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番

●佛具調度所●
●佛像佛具位牌木鉦
●何も神佛具を調製する覺悟心を以て奉事仕候●
宮殿憧天蓋其他一式
▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
御用達
京都寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」事 大佛師 辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話下三二五八番
●御用仰せ被下候はゞ叮嚀深切を旨と致候●

●佛壇、佛具一切卸小賣
店員十三歲ヨリ四五六歲迄之者五名御世話被下度候
定價表 郵稅四錢
卸部 三法堂藤田總治
京都市三條通小橋西入中島町
各宗御本山御用達
畫佛 表具 大佛師
長距離電話中二七三番
振替口座東京二〇七一番
大阪四二五九
同區小橋東入
小賣部 三法堂佛具陳列場

生徒募集
千葉縣千葉郡千葉町院內
（千葉神社裏通）
（憲兵屯所向橫丁）
私立 山口刺繡學校
校長 山口京太郎
規則書入用の方は御通知次第校則を進呈いたします

▲本誌定價一册十三錢郵稅五厘▼
本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所
發行者東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎
印刷人鈴木日雄
（東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍印行）